

よしあし

JAPAN OBOE CLUB

第3号 1986年12月25日

編集・発行 日本オーボエ・クラブ広報委員会
東京都豊島区西池袋3-25-2大晴ビル 葉西池店内
会報関係の連絡先
〒241 横浜市旭区本村町17-1-612 安原理喜
郵便振替「日本オーボエ・クラブ」東京 9-89563

不許複製

ようやく発行第3号

新潟県オーボエ協会

ヤマハ・オーボエ選に露威

会報の完成が4ヶ月も遅れ、会員の皆様には大変ご心配とご迷惑をおかけ致しましたこととお詫び申し上げます。来年度からは編集方法を改める方向で検討しております。

JOC 今後の課題

8月18日に東京新宿「ルノワール」にて日本オーボエ・クラブ(JOC)運営委員会が開かれた。主な議題は①地方会員の諸問題と②アマチュアの加入で、時間不足のため十分な結論には至れなかった。

①地方会員の諸問題は特に会報第2号での関西、九州会員に答える意味で討議された。しかし、関東、関西地区以外では会員が点在しており、支部などの組織も現時点では判断困難であり、今後推進委員会が検討し、答申を行なうこととなった。一応、次回の総会までに何等かの結論が出される予定である。

②アマチュア奏者よりクラブへの加入や会報の購読の要望が寄せられており、その対処が検討された。しかし、会報はあくまで会員のみを対象とし、また、現在の会報の編集能力と内容はその力を有しないとの結論に達した。さらに、著作権法案が演奏家間でも討議されている現在、会報の軽々しいコピーも許すべきではないとの意見も出され、この結論も推進委員会へ委ねられた。

6月13日新潟市音楽文化会館にて新潟県オーボエ協会第3回発表会が催された。この協会は新潟県在住アマチュア奏者の集まりで、昭和59年に発足し、現在会員数約30名、会長の相田純久氏(医師、青山治一氏に師事)、寺田尚弘氏(新潟市音楽文化会館勤務)、村山文隆氏(教諭、国立音大卒)を中心に活動している。

第一部はアルビノーニ、バッハ、シューマン、サンサーンス、プーランク、鍋谷毅「4本のオーボエのためのわらべうた」が会員によって演奏され、第二部はゲストとして安原理喜氏がヴィーダーケーア「ソナタ・ホ短調」、ブリテン「6つの変容」を演奏、第3部は20名のオーボエ合奏によるヘンデル「水上の音楽」抜粋で盛会の内に終了した。

同協会は横の連絡の乏しい全国のアマチュアオーボエ界でも特異な存在であり、今後のJOCのアマチュアに関する活動のサンプルとも言えよう。ただし、アマチュア奏者にも音大出身者、元プロ奏者がおり、逆にプロ奏者の一割強がアマチュア出身であることにプロとアマの区別の難しさを改めて感じさせる。

ヤマハ(日本楽器製造KK)が独自の設計・制作による国産初の本格的オーボエ2機種を11月15日発表した。いきなりプロフェッショナルなモデルを発表したヤマハに敬意を表したい。ただし、プロ奏者の一部からは開発の段階でもっと国内のオーボエ奏者の参加を求めなくてはなかったかとの意見も聞かれ、今後のヤマハの姿勢にも着目したい(関連記事10ページ参照)。

JDR社長、参議院議員へ

先の選挙で元日本ダブルリードKK(JDR)社長、広中和歌子氏が参議院議員(公明党)となり、後任に小林良子氏が就任した。その披露の宴が11月15日、東京・ホテル・センチュリーハイアットで大勢のオーボエ・ファゴット奏者を交えて催された。広中氏には音楽に詳しい議員として今後の活躍に期待したい。

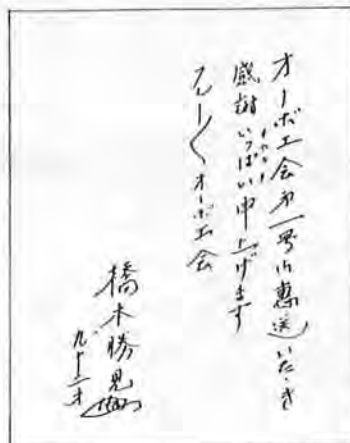


新潟県オーボエ協会事務局
〒951 新潟市一番堀通り町 3-2
新潟県音楽文化会館内寺田尚弘
☎0252-24-5813

特集 《日本のオーボエのルーツを探る パート2》

日本オーボエ・クラブ広報委員会編

前々号、パート1はいかがでしたか。92歳の橋本勝見氏より「第一号御恵送いただき感謝いっぱい申し上げます。フレーフレーオーボエ会」とのお葉書を戴きました。嬉しいですね。



八尾五郎再発見

さて、今回は別の角度から再びルーツに迫ってみたいと思います。日本の洋楽史に関する書物のどこかに「オーボエ事始め」の記述があるのではなかろうか、それを探してみようということなのです。ありました、ありました。その名もズバリ「日本の洋楽百年史」（井上武士監修、秋山龍英編著、第一法規出版、昭和41年発行）という分厚い書物で、明治5年から昭和20年までの洋楽に関する当時の新聞、雑誌、文書等からの転載による資料集です。当時の演奏会、演奏者、批評、通達等が年代順に収録され、我々にとって本当に興味深い、というよりも掛け値なしに「面白い」内容で、読んでいて思わず引き込まれて

まいります。

さて、この本で最初にオーボエに関する記述があるのは明治34年、3月29日の読売新聞「明治音楽会評判記」の中です。これは当時の会員制鑑賞団体で、この頃の音楽会は洋、邦楽両者を組合せたものが殆どだったようです（以下、斜体は原文のまま）。

「さて第一部の管絃楽中最初の曲は仏国の大家オウベル作のレールミダチ祭の歌劇の序で、頗る豪壮なものであつた。イントロダクションに於ける美麗旋律はオーボイとクラリネットとに依りて発せられ、一低一品旋律は交互に移り、よく調和せられた。」

残念ながらこのオーボイ氏の名前は不明で、オーボエ奏者の名前が登場するのは明治38年7月8日、東京音楽学校第16回卒業式での演奏会になります。

オーボエ独奏
声楽部卒業生 島田英雄
ロマンツェ メンデルズゾーン作曲

しかし、我々としては今一つ疑問が残ります。今後の調査に期待しましょう。

ところで、居ました居ました、八尾五郎さんが!!。明治44年3月発行「音楽」第2巻第3号『帝国劇場の楽手』記事中に、

「目下帝国劇場で養成して居る楽手は左記一五名で音楽の素養ある百

余名中から選抜したもので成績も大に見るべきものがある相だ。本年末までは絃楽のみに全力を尽くし、来年の一月から管楽を始める相である。楽手の氏名左の通り……」

とあり、7人目に八尾五郎氏の名前が揚げられています。編集部では当初「当時はオーボエ持ってりや入れたんだろなー、いいなー」などとバカな憶測を巡らせていたのですが、当時もキビシイ競争社会だったので、八尾さんすみませんでした。

さて、もう一つ興味深い記事をピックアップしておきましょう。大正15年8月「音楽評論」第11号所載、近衛秀麿指揮・日響第11回予約演奏（定期演奏会）の批評です。

「ブラームスのハンガリアンダンス第三番は特にオボエの活躍を要するもので、最近著しく進境を示した阿部 [万次郎、編集部注] の日本人離れのしたオボエは、吾人に満足を与へたが、ただブラームスの気分は、もつともつと深いドイツ的のものを要求すると思つた。それにはフランス製の楽器では到底駄目だといふ同情評もあつた。」

非常に味わい深い批評だと思います。あえてコメントは付けません。さて、皆様の中で日本のオーボエのルーツに関する資料、何でもよろしい、をお持ちの方がおられましたらぜひ編集部宛てご一報下さい。実はタネが尽きて困っているのです。

(本間正史、安原理喜)

《日本のオーボエのルーツを探る》

鈴木清三

さて、ルーツの究明は多少とも進んだがほとんど終りに近いようだ。かつてテレビで見たほどうまく行かないというのが本音である。でも、あきらめる前にこの人の話は聞いておかねばなるまい、ご存じ鈴木清三氏である。その功績うんぬんは今更ここで書く必要なし。しかし「ポチャン」なる愛称のルーツを聞きそびれたのはうかつでした。



今井 薫（武蔵野音大卒、フリー）
今晚は、お忙しいところをお邪魔致します。先生が現役オーケストラ奏者の最長老ということで、日本のオーボエのルーツのお話を伺いにまいりました。

鈴木清三（新日フィル、桐朋音大）
やあ、誰が来るのかと思ったら君だったのか、コンクール聴いたよ。でもね、もうルーツなんて分からないんじゃないかなあ。

今井 明治34年まで編集部で調べたんですけど。

鈴木 どれどれ……本当だ。でも、僕の知っているのはもっとずっと後からだなあ。

今井 では、先生のルーツのお話をお願いできますか。

鈴木 何から話しましょうか。

今井 先生がオーボエを始められたきっかけは？

鈴木 僕は正11年(1922)札幌生まれでね、家は清元の先生だったんです。僕もやらされました。兄がね、札幌のNHKに勤めていて、その関係で洋楽のレコードもよく聴い

ていました。そのうちに段々好きになっていったんですね。旧製の札幌商業に入ってから軍隊ラップとクラリネットを同時に始めて、ラップはよかったんだけどクラリネットの音がなかなか出なくてね、一週間目に鳴った時は嬉しかったね。

今井 あら、じゃあ最初はオーボエじゃなかったんですね。

鈴木 それから一年くらいして、札幌の中央交響楽団というアマチュアオーケストラでクラリネットを吹いていたんですけど、そこの唯一のオーボエの人が召集で行っちゃったわけね、それで前々から魅力を感じていたオーボエを始めることになったんです。16歳くらいだったかな、楽器持ったその日に新世界吹かされてねえ。

今井 エー、で、楽器はどこのものだったんですか。

鈴木 チェコ製のコーレルトゾーンというシンプルシステムでした。当時の北海道にオーボエはこれ一本しかなかっただろうね。だから、楽器図鑑見ながらリード作ったんですよ。まあそんなある日、父から音楽学校に入ってみたいなと言われてね、信じられなかったね。その間色々あったけど。

今井 それで芸大、当時の東京音楽学校に入られたのですか。先生はどなただったのですか。

鈴木 当時の先生は中津井実さん（海軍軍楽隊出身、第1号参照）でした。先輩が次々と軍隊に取られて大変な時代でした。僕が2年の頃、新響の阿部万次郎さんから新響に入らないかとの丁寧なお誘いの手紙を戴いたんです。考えましたね。でも断りました。当時は学校を辞めるとすぐに軍隊に入らなければならなかったんです。

今井 信じられないことばかりですね。ところで、その頃、楽器はどうなされたんですか。

鈴木 当時はなかなか手に入らなくてね、コーレルトゾーンを千円で買ってもらいました。

今井 千円、てどの位なんですか？

鈴木 月給が60円程度でしたから、えらく高い楽器でした。父が北海道から上京して来て「大事にしてくれよ」と言って買ってくれたんです。僕も学校を2年で繰り上げ卒業させられて、軍隊に行つてね、その間に預けておいた所から盗難にあったんです。

今井 エー、戦災で焼けちゃったとかじゃなくてですか。

鈴木 そう。それで戦後、芸大に戻ったら古いヘッケルが2本あってね、それを借りて吹いていました。

今井 それで、その後どのような活動をされたのですか。

鈴木 昭和21年に学校に戻り、芸大の先生になったんです。でも色々あって27年に辞めました。それ以来演奏に専念しようと思ひ、生徒を教えなくなりましたが、故斎藤秀雄先生に頼み込まれて桐朋の先生を始めました。

演奏の方では、戦後、NHKサロン・アンサンブル、東フィル特別団員、ラモー室内楽団と3つをやっていたんですが、その後、日フィル、新日フィルと、ご存じの通りです。

今井 先生はロングスクレープを日本で初めて取り入れた方だとお聞きしたのですが。

鈴木 始めの頃はね、グーセンスのレコードを聴いてすごく感銘を受けてね、カメッシュとかフランスの人達の音も聴いたんだけど、やっぱりグーセンスの音が好きでね。だから、始めはショートスクレープだったんです。

今井 それがどうして……

鈴木 戦後、ロスアンゼルス・フィルが日本に来た時の生の音を聴いてびっくりしてね。その時オーボエを吹いていたギヤスマンからリードを買ったのがロングスクレープの始めでした。アメリカのオケの方が日本へ早く来ましたからね。僕もヨーロッパへ行きたかったけど時代的に行けなくてね、自己流で勉強しました。今の若い人は交流も多いし、どこへでも自由に行けるし、そういう点では恵まれていますね。

僕は、かつて恐い先生と言われたらしいけれども、今、僕は生徒に

リードや音色を強制しないことにしています。皆同じ音でも面白くないしね。

今井 なるほど。

鈴木 アメリカでもタビトの時代にはリードが重かったけど、今の若い人達は軽くなってきたみたいですね。逆にフランスは重くなっているみたい。昨年の子ニーのコンクールでフランスの若いオーボエ吹きの音は良かったね。

今井 それでは最後に、若いオーボエ吹きに一言。

鈴木 皆テクニク的によく勉強していますね。ただ、楽器の調整にのんきな人が多いみたいだね。リードもそうだけど、オーボエってのは調整をしないと鳴らない楽器だからね。しかし、僕の時代と違って仕事をするのが大変で可愛そうですね。

今井 本日はお忙しいところ、大変有難うございました。【文責安原】

会員動静
【新入会員】



今井 そうでしたね。

鈴木 だんだんと世界が近付いているみたいだね。でもあんまりインターナショナルになって特徴が無くなるのも面白くないかもね。

今井 話は変わりますが、先生の楽譜のコレクションはものすごいと伺っていますが。

鈴木 僕の時代にはコピーなんてないし、市販の楽譜も少なく、芸大の図書館にもオーボエの曲は5~6曲しかなかったからね。NHKの資料室に行って全部借り出して写譜したんですよ。今2千曲位あるんじゃないかな。スコアのないものはパート譜からスコアを作っています。

今井 (楽譜の前でしばし呆然) すごい量ですね。ここへ来れば探しているものが皆見つかりそう。所で、先生は現在の日本オーボエ・クラブに対してどのようにお考えですか。

鈴木 まだあまりわかりませんが、こういうクラブができるということは良いことだと思います。どんな楽器、バロックとかモダンとかもありますし、リードに関して色々で、それをお互いに知る良い機会だと思います。

ミネさんのワンポイントアドバイス ワレを発見したら?

冬はオーボエ吹きにとって嫌な季節、特に新しい楽器はワレが気になりますね。もしワレを発見したら? オーボエ修理・調整に定評のあるミネさんごと、アトリエ・ミネの谷峰忠雄さんにその対処を伺いました。

① ワレ、特にトーンホールにかかるワレを発見したらできるだけ速やかに修理する。もし修理を専門家に依頼するならば極力個人的な修理は避ける、後の修理が困難になる。

② 自分でワレの修理・修正をする場合は①の理由で完全に行なうようにする。この場合、粘着度の少ないサラっとした接着剤(アロンアルファ)を用いる。

③ 遠方からワレの修理を専門家に依頼する場合、ワレの範囲(できればキイを外して確認)に鉛筆で印を付けておく。冬場は木が縮んでワレが見えなくなることが往々にある。

④ ワレの中に油(キイ・オイル、ボア・オイルなど)やホコリは禁物、接着剤が効かなくなる。つまり、早いうちの修理こそベストと言える。

1987年 演奏会案内

11-05-1530+1930 横浜大倉山記念館
＜原田知篤オーボエリサイタル＞
pf近藤春江。ドニゼッティ「ソナ
タ」、サンサーン「ソナタ」、他。

11-09-1900 横浜・旭公会堂。＜#7
旭区文化祭・名曲鑑賞会＞北島章、
vl永峰高志、va菅沼準二、vc徳永兼
一郎。モーツァルト四重奏曲。

11-09-1900 東京・石橋メモリアル
＜東京トリオダンシユ演奏会＞
山本晴勇、cl横川晴晃、fg岡崎耕
治、ポッツァ、ユン、「木管三重奏」

11-12-1900 東京・聖三一教会。
＜聖三一合奏団 #14演奏会＞安原理
喜、北島章、cl村井祐晃、fg岡崎耕
治、他。ジェイコブ「嬉遊曲」、モ
ーツァルト「ドンジョヴァンニ」他

11-14-1830 いわき市文化センター
＜前川光世オーボエリサイタル＞
pf本荘玲子。プーランク「ソナタ」
ドビュッシー「シンククス」、R.コル
サコフ「主題と変奏」、ルイエ他。

11-21-1830 東京・イイノホール
＜pf吉岡千賀子とN響メンバーによる
室内楽＞北島章、fg霧生吉秀、
他。プーランク「トリオ」、モ
ーツァルト「管pf五重奏曲」、他。

11-28-1900 東京・芝ABC会館
＜虎ノ門交響楽団 #36定期演
出功。モーツァルト協奏曲。

11-30-1730 横浜・紅葉坂教会
＜横浜ノネット #17回定期演奏会＞
原田知篤、fg加藤洋男、hn飯笹浩
二、他。ボッケリーニ「六重奏曲
ob.vl.va.hn.fg.cb.」、他。

12-03-1900 東京文化会館
＜新日フィル定期ガラコンサート＞
鈴木清三、cd山本直純。
イベール「寄港地」、他。

12-03-1900 大阪倶楽部4Fホール
＜#7橋本徹雄オーボエリサイタル、
アンコール名曲集＞。pf山下泰夫。
ヘンデル「ラルゴ」、シューベルト
「セレナーデ」、他。

12-03-1900 東京サントリーホール
＜辻功・pf大竹淳子ジョイント・リ
サイタル＞フンメル「序奏・主題・
変奏」、サンサーン「ソナタ」、ス
ラヴィツキー「組曲」、他。

12-05-1900 東京エオリアンホール
＜東京プロアルテ合奏団 #48＞
井口博之、fl宮本明恭、va中竹英
昭。ホルスト「トリオfl.ob.va」他

12-08-1900 東京永楽倶楽部舞踏場
＜プーランク木管楽器の為の音楽＞
ヨナス、アウロス木五 Stuttgart。
「obソナタ」、「六重奏曲」、他。

12-18-1900 東京・都市センター
＜ウィーン木管アンサンブル＞
トゥレチェク、他。ベートーヴェン
「五重奏曲Es」、他。

12-21-1500 松蔭女子学院大学教会
＜ザ・ミルキーウェイクインテット
inチャペル＞林哲也、vc大沢明、他

12-21-1400 大阪・森の宮ピロティ
＜モーツァルト6大協奏曲＞トゥレ
チェク、cd門良一、モーツァルト室
内。「ob協奏曲」「協奏交響曲」他

12-21-1830 厚木ロイヤルホテル
＜クリスマスコンサート＞安原理喜
pf中井徳子。パッサ「ソナタ g」、
ヴィーダーケーア「ソナタ」、カリ
ヴォダ「サロンの小品」、サンサー
ン「ソナタ」、ドニゼッティ、他。

12-24-1830 東京こまばエミナス
＜東京校正ウインドソロイスト＞
前川光世、cd山上純司、他。アルビ
ノーニ「協奏曲 d op.9-2」、他。

この欄は演奏会の終了如何に関わ
らず、今後の我々のプログラミング
の参考として掲載しています。各種
の雑誌・案内等を資料にしていますが、遠隔地程資料に乏しく、皆様
のご協力をお願いしたいと思っ
ています。掲載の対象となるのは、オー
ボエ・ソロ曲を中心として、木管五
重奏曲、バロックのトリオソナタを
原則として除く室内楽曲です。演奏
会は公開のものであれば、有料無料
・プロアマ・会員非会員を問いませ
ん。ただし、学生のおさらい会は除
きます。どうか、編集部宛てにチラ
シなどの郵送をお願い致します。
レコード・CD案内欄は頁数の都合
で休載致します。また、「立ち読
みコーナー」はその内容がバンド
ジャーナル、バンドピープル、パイ
パーズの三誌に集中するため、各誌
をご購読下さい。ただし、これら以
外、特に地方紙での記事はここで紹
介したいと思っています。

01-01-1300 厚木ロイヤルホテル
＜ニュー・イヤーズ・コンサート＞
安原理喜、pf中井徳子。=12-21。

01-10-1900 東京サントリーホール
＜リサイタルシリーズ 宮本文昭＞
vl景山誠治、va原田幸一郎、前田憲
男カルテット、他。ドビュッシー
「シンククス」、フィオッコ「ソナ
タ G」、モーツァルト「五重奏曲
K406」、前田憲男編曲、他。

01-12 京都・十字屋ピアノサロン
＜オーボエピアノソプラノの夕べ＞
若崎勇、pf小堀加寿子、sp豊住征子

01-15-1600 東京・ルーテル市ヶ谷
＜フルートオーボエピアノの夕べ＞
伊藤正文、fl吉田雅信、pf渡辺純
子。ケルターボーン「obソナタ」、
以下fl.ob.pf、オッテン、イペ
ール、ゲーゼンス、ジュルベール。

01-18-1400 東京聖蹟桜ヶ丘アウラ
＜ニューイヤーズコンサート木管五重
奏＞安原理喜、cl村井祐晃、fg津田
雄三、他。ジェイコブ「3小品ob
fg」、モーツァルト「嬉遊曲 B」他

01-20-1830 東京文化会館小ホール
作曲家＜篠原真＞作品個展。辻功、
pf藤井一興。「オブセッション」、
「レフレクション」、他。

02-07-1630 東京・JDRサロン
＜市原満obリサイタル＞pf八田尚
子。アルビノーニ「協奏曲 d,D」、
カリヴォダ「小協奏曲」、ツインマ
マン「協奏曲」、ヴィヴァルディ他

03-02-1900 東京・ゆうぼうと
＜東京交響楽団現代日本音楽の夕＞
小島繁子、hp井上久美子、cd国分
誠、他。白石和彦「翁と傲。ob。
d'amore, hp, orch.」、他。

03-15 東京サントリーホール
＜イギリス室内管弦楽団＞ニール・
ブラック、cdテイト。ヴォーン・
ウィリアムズ「協奏曲」。

03-28-1400 横浜磯子区山崎ホール
＜ジョイントコンサート＞原田知篤
fg加藤洋男、pf杉山哲雄。サンサー
ン「ソナタ」、ボクサ「夜想曲」、
プーランク「トリオ」、ヘンデル
「トリオソナタ」、他。

11月15日に発売されたヤマハ・オーボエ(1ページ参照)は設計の異なる2機種よりなる。購入した奏者に合わせて音程調整等を施すそうであるが、一般的な奏法で吹く限り、いずれも特別な音程調整は不要であろう。

ヤマハカスタムオーボエ YOB-811

セミ・オート。定価78万円。アメリカのレイ・スティル氏モデル。音の抜け具合は明るく、楽であり、第3オクターブ・キーを欠いているが超高音域でもその必要性を感じさせない。キイの感触が非常に馴染みやすいのはさすがである。ただし、おそらく鳴り易さを追求した結果だとは思いますが、抵抗感に乏しく、物足りなく感じる奏者もいよう。

ヤマハカスタムオーボエ YOB-822

フル・オート。定価84万円。ドイツのヴィンフリート・リーパーマン氏モデル。前者とはそのシステムだけではなく、音の鳴りそのものが異なる。これほど設計思想の異なる機種を同時新発売するところにヤマハの独自性を伺わせる。音の抜けは切れ味良く、適度の抵抗感もあり、ドイツとフランスの融合を感じさせる。ただし楽器が重く、指への感触も今一つである。このシステムの欠点である現代奏法への対処と楽器調整の面から、今後この機種でのセミ・オートが期待されよう。(RY)

この楽器は米国ポール・コヴェイ氏の独自の設計によるものである。氏はオーボエをジョン・マック氏に師事、楽器制作をハンス・ムーニング氏に師事した。この楽器は強く吹いても決して乱暴にならない安定性を感じさせ、穏やかな鳴りの冷静な楽器との印象を与える。反面、強い表現にはコントロール力を要求されることになり、奏者によって意見の別れるところであろう。

この楽器の特長は、トーンホールに独自の加工があり、上管とベルにオプションがあって使い分けが可能なことである。(RY)

上管 — TP、ポリプロピレン材

TW、グラナディア材

ベル — BS1、オーケストラ

BS2、ソリスト

総輸入元 オフィス・コヴェイ・ジ

ャパン ☎03-403-6495

総発売元 ㈱東京ミュージック・ア

ーツ ☎03-403-6091



㈱テイジンが開発したこの布は超極細繊維を使用し、柔らかく、メッキを傷つけずに楽器やキイの汚れを拭き取る。綿織物では不可能だった汚れを捕らえ、従来のシリコン・クロスのような化学処理をしたものと異なり、洗濯による性能劣化もないとのこと。定価1枚1200円。

発売元 ㈱フォックス・ウインズ

☎052-262-5400

日本オーボエ・クラブ

総会・新年会

1987年2月前後(日時場所未定)に定例の総会ならびに新年会を行ないます。詳しくは別途通知致します。

運営委員への立候補・問合せ

山本安洋 ☎0424-85-3558

楽器雑情報

マリゴのこの数年の改良には目を見張るものがあり、多くのプロ奏者がマリゴを使用するようになったのは周知の通りである。そのマリゴ社の株を握っているのがドイツのハンスクロイル社と聞いてビックリなのであるが、最近のマリゴ・オーボエにはまた新たなシステムが追加された。従来の低B♭にあったリゾナンス・キイが低Hでも開くようになっている。

ロレー社は形勢悪しと思ったか、新たにドイツ・モデルを開発した。外見は全く今までのものと同じだが、吹いてみれば明らかに異なった音色と抵抗感である。世界の求めるオーボエの音色が変化しつつあるようだ。ヤマハのオーボエ開発もその点で苦勞したのではないだろうか、2機種同時発売というところにその一つの結論が伺える。しかし、我々としてはそれだけ選択の余地が増えるわけだから、素直にメダタイと喜ぶべきであろう。(RY)

編集後記 申し訳ない、面目ない。よしあし第3号は未完のまま時の経過と共に何度も内容を訂正・追加してきた。そして発行は越年し、ここに「新年おめでとう」と書かなければならなくなりました。

(自他共に認る遅刻の大名R.Y.)

